行人行歌

水牧山若

始

特109
197

行人行歌

牧水

大正
4. 4. 29
内交

書叢集選歌和代現
編二第
行發院書竹植

いかなればこひの
はじめにかくばかり
さびしきことを
おもひたまふるぞ

牧水

凡例

本書には「別離」「路上」「死か藝術か」「みなかみ」「秋風の歌」の五歌集、卽ち明治四十年頃より大正三年に至るまでの作約三千首のうちより自ら抄出せるものを輯めたり。概ね東京に在りての作なれどたゞ「みなかみ」一卷のみは全部わが鄕里日向國に歸省中の詠なり。

自作中よりその一部を選み出すといふは誠に難き業なり、本書の印刷校正に當りてこの感甚だ深し、たゞ忍び難き駄作中よりその幾分を削除し得たりと見ば或は自ら慰まむか。

大正四年四月

相州北下浦の海濱にて

著者

目次

別離……一
路上……八七
死か藝術か……一三
みなかみ……一六三
秋風の歌……二一

別離

上卷

水の音に似て啼く鳥よ山ざくら松にまじれる深山の畫を

なにとなきさびしさ覺え山ざくら花ちるかげに日を仰ぎ見る

行きつくせば浪青やかにうねりゐぬ山ざくらなど咲きそめし町

母戀しかかるゆふべのふるさとの櫻咲くらむ山
の姿よ

父母よ神にも似たるこしかたに思ひ出ありや山
ざくら花

春は來ぬ老いにし父の御ひとみに白ううつらむ
山ざくら花

吾木香すすきかるかや秋くさのさびしきはみ
君におくらむ

秋晴や空にはたえず遠白き雲の生れて風ある日
なり

秋の雲栃と榛との樹樹の間にうかべるを見て君
も語らず

秋の夜こよひは君の薄化粧さびしきほどに靜か
なるかな

君去にてものの小本のちらばれるうへにしづけ
き秋の夜の灯よ

いと遠き笛を聽くがにうなだれて秋の灯のまへ
ものをこそおもへ

靜けさや君が裁縫の手をとめて菊見るさまをふ
と思ふとき

君は知らじ君の驛寄るを忌むごときはかなごこ
ろのうらさびしさを

相見ねば見む日をおもひ相見ては見ぬ日を思ふ
さびしきこころ

ふとしては君を避けつつただ一人泣くがうれし
き日もまじるかな

■

立川の驛の古茶屋さくら樹の紅葉のかげに見お
くりし子よ

霧ふるや細目にあけし障子よりほの白き秋の世
の見ゆるかな　（二首御嶽にて）

霧白ししとしと落つる竹の葉の露ひねもすや月
となりにけり

なつかしき春の山かな山すそをわれは旅びと君
おもひ行く　（二首高尾山）

思ひあまり宿の戸押せば和やかに春の山見ゆう
ち泣かるかな

日のひかり水のひかりの一いろに濁れるゆふべ
大利根わたる

けふもまたこころの鉦をうち鳴しうち鳴しつつ
あくがれて行く　（三首中國を巡りて）

幾山河越えさり行かば寂しさの終てなむ國ぞ今
日も旅ゆく

峡縫ひてわが汽車走る梅雨晴の雲さはなれや吉
備の山山

日向の國都井の岬の青潮に入りゆく端に獨り海
見る　（六首日向にて）

大うねり風にさからひ青うゆくそのいただきの
白玉の波

港口夜の山そびゆわが船のちひさなるかな沖さ
して行く

かたかたとかたき音して秋更けし沖の青なみ帆
のしたにうつ

夕さればいつしか雲は降り來て峯に寢るなり日
向高千穂

秋の蟬うちみだれ鳴く夕山の樹蔭に立てば雲の
ゆく見ゆ

樹間がくれ見居れば阿蘇の青烟かすかにきえぬ
秋の遠空　（阿蘇山）

やや赤む暮雲を遠き陸の上にながめて秋の海馳するかな　（周防灘）

山行けば青の木草に日は照れり何に悲しむわがこころぞも　（箕面山）

われ車に友は柱に一語二語醉語かはして別れ去りにけり　（大阪にて葩水と別る）

一の札所第二の札所紀の國の番の御寺をいざ巡りてむ　（三首紀伊路）

粉河寺遍路の衆のうち鳴らす鉦鉦きこゆ秋の樹の間に

鉦鉦のなかにたたずみ旅びとのわれもをろがむ秋の大寺

草ふかき富士の裾野をゆく汽車のその食堂の朝の葡萄酒

晩夏の光しづめる東京を先づ停車場に見たる寂しさ

明治四十年早春安房の渚にて歌へる、七十六首のうち。

戀ふる子等かなしき旅に出づる日の船をかこみて海鳥の啼く

山ねむる山のふもとに海ねむるかなしき春の國
を旅ゆく

春や白晝日はうららかに額にさす涙ながして海
あふぐ子の

ああ接吻海そのままに日は行かず烏翔ひながら
死せ果てよいま

接吻くるわれらがまへにあをあをと海ながれた
り神よいづこに

山を見よ山に日は照る海を見よ海に日は照るい
ざ唇を君

いつとなうわが肩の上にひとの手のかかれるが
あり春の海見ゆ

こころまよふ照る日の海へ中ぞらへうれひねむ
れる君が乳の邊へ

砂濱の丘をくだりて木の間ゆくひとのうしろを
見て涙しぬ

ともすれば君口無しになりたまふ海な眺めそ海
にとられむ

君かりにかのわだつみに思はれて言ひよられな
ばいかにしたまふ

涙もつ瞳つぶらに見はりつつ君かなしきをなほ
語るかな

君さらに笑みてものいふ御頬の上にながるる涙
そのままにして

立ちもせばやがて地にひく黒髪を白もとゆひに
結ひあげもせで

このごろの寂しきひとに強ひむとて葡萄の酒を
もとめ來にけり

闇の夜の浪うちぎはの明るきにうづくまりゐて
蒼海を見る

白鳥はかなしからずや空の青海のあをにも染ま
ずただよふ

かなしけに星か降るらむ戀ふる子等こよひはじ
めて添寢しにける

ものおほく言はずあちゆきこちらゆきふたりは
かなし貝をひろへる

渚ちかく白鳥群れて啼ける日の君がかほより寂
しきはなし

浪の寄る眞黒き巖にひとり居て春のゆふべの暮
れゆくを見る

夕海に鳥啼く闇のかなしきにわれら手とりぬあはれまた啼く

わがうたふかなしき歌やきこえけむゆふべ渚に君も出で來ぬ

くちづけの終りしあとのよこ顔にうちむかふ晝の寂しかりけり

いかなれば戀のはじめに斯くばかり寂しきことをおもひたまふぞ

白晝さびし木の間に海の光る見て眞白き君が額のうれひよ

ふと袖に見いでし人の落髪を唇にあてつつ朝の海見る

海女の群からすのごときなかにゐて貝を買ふなりわが戀人は

くちつけは永かりしかなあめつちにかへり來てまた黒髪を見る

春の海さして船行く山かげの名もなき港晝の鐘鳴る

大ぞらの神よいましがいとし兒の二人戀して歌
うたふ見よ

君を得ぬいよいよ海の涯なきに白帆を上げぬ何
のなみだぞ

あな沈む少女の胸にわれ沈むああ聽けいづく悲
しめる笛

吹き鳴らせ白銀の笛春ぐもる空裂けむまで君死
なむまで

みじろがでわが手にねむれあめつちになにごと
もなし何の事なし

思ひ倦みぬ毒の赤花さかづきにしぼりてわれに
君せまり來よ

矢繼早火の矢つがへてわれを射よ滿ちて腐らむ
わが胸を射よ

ひたぶるに木枯すさぶ斯る夜を思ひ死なむずわ
が愚鈍見よ

悲し悲し火をも啖ふと戀ひくるひ斯くやすらか
に抱かれむこと

紅梅のつめたきほどを見たまへとはや馴れて君
笑みて唇よす

千代八千代棄てたまふなと云ひすててつとわが
手枕きはや睡るかな

涙さびし夢も見ぬげにやすらかに寢みだれ姿わ
れに添ふ見て

春は來ぬ戀のほこりか君を獲てこの月ごろの悲
しきなかに

床に馴れ羽おとろへし白鳥のかなしむごとくけ
ふも添寢す

君かりにその黒髪に火の油そそぎてもなほわれ
を捨てずや

手枕よ髪のかをりよ添ひぶしにわかれて春の夜
を幾つ寢し

別れ居の三夜は二夜はさこそあれかがなひて見
よはや十日經む

かへれかへれ怨じうたがひに倦みもせばいざこ
の胸へとく歸り來よ

君來ずばこがれてこよひわれ死なむ明日は明後
日は誰が知らむ日ぞ

この手紙赤き切手をはるにさへこころときめく
哀しきゆふべ

戀しなばいつかは斯る憂を見むとおもひし昨の
はるかなるかな

心ゆくかぎりをこよひ泣かしめよものな言ひそ
ね君見むも憂し

怨むまじや性は清水のさらさらに淺かる君をな
にうらむべき

然なり先づ春消えのこる松が枝の白の深雪の君
とたたへむ

われ歌をうたへりけふも故わかぬかなしみども
にうち追はれつつ

みな人にそむきてひとりわれゆかむわが悲しみ
はひとにゆるさじ

あな寂し縛められて默然と立てる巨人の石影ま
ばや

いと幽けく濃青の白日の高ぞらに鳶啼くきこゆ
死にゆくか地

一すぢの糸の白雪富士の嶺に殘るがかなし水無
月の天

風わたる見よはつ夏のあを空を青葉がうへをや
よ戀人よ

山を見き君よ添寢の夢のうちに寂しかりけり見
も知らぬ山

■

つと過ぎぬすぎて聲なし夜の風いまか靜かに木
の葉ちるらむ

風落ちぬつかれて樹樹の凪ぎしづむ夜を見よ少
女さびしからずや

風凪ぎぬ松と落葉の木の叢のなかなるわが家い
ざ君よ寢む

下卷

いざ行かむ行きてまだ見ぬ山を見むこのさびし
さに君は耐ふるや

いざ行かむ行衛は知らねとどまらばかなしかり
なむいざ君よ夙く

■

野のおくの夜の停車場を出でしときつとこそ接
吻はかはしけるかな

木の芽摘みて豆腐の料理君のしぬわびしかりに
し山の宿かな

春の日の滿てる木の間にうち立たすおそろしき
までひとの美し

小鳥よりさらに身がろくうつくしくかなしく春
の木の間ゆく君

靜かなる木の間にともに入りしときこころしき
りに君を憎めり

君すててわれただひとり木の間より岡にいづれば春の雲見ゆ

山の家の障子細目にひらきつつ山見るひとをかなしくぞ見し

ゆく春の山に明るう雨かぜのみだるるを見てさびしむひとよ

■

くちつけをいなめる人はややとほくはなれて窗に初夏の雲見る

ひとりなればこの望月の夏の夜のすずしきよひをいざひとり寢む

八月初め信州輕井澤に遊びぬ、歌三十首のうち。

火を噴けば淺間の山は樹を生まず茫として立つ青天地に

八月や淺間が嶽の山すそのその荒原にとこなつの咲く

麓なる山のひとつのいただきの青深草に寢て淺間見る

火の山やふもとの國に白雲の居る夜のそらの一すぢの煙

夜となればそらを掩ひて高く見ゆ白晝は低しけむり噴く山

火の山にしばし煙の斷えにけりいのち死ぬべくひとのこひしき

女ありみやこにわれを待つときく靜かなりけり夜半の山の火

月見草見るつつ居ればわかれ來し子が物思ふすがたしぬばゆ

ゆるしたまへ別れて遠くなるままにわりなきまにうたがひもする

青草のなかにまじりて月見草ひともと咲くをあはれみて摘む

ものをおもふ四方の山べの朝ゆふに雲を見れどもなぐさみもせず

糸のごとくそらを流るる杜鵑あり聲にむかひて涙とどまらず

ほととぎす聽きつつ立てば一滴のつゆよりさびしわが生くが見ゆ

胸にただ別れ來しひとしのばせてゆふべの山を
ひとり越ゆなり

■

とき折りに淫唄うたふ八月の燃ゆる濱ゆき燃ゆ
る海見て　（二首故郷にて）

雲去ればもののかげなくうす赤き夕日の山に秋
風ぞ吹く

なにものに欺かれ來しやこの日ごろ口惜し腹立
たし秋風を聽く

いねもせで明かせる朝の秋かぜの聲にまじりて
すずめ子の啼く

野菊ぞとさも媚びなよるすがたして野に咲く見
れば行きもかねつる

秋かぜは空をわたれりゆく水はたゆみもあらず
葦刈る少女

足とめて聽けばかよひ來河むかひ枯葦のなかの
葦刈の唄

行き行きて飽きなば旅にしづやかにかへりみも
なく死なましものを

君見れば獣のごとくさいなみぬこのかなしさを
やるところなみ

かかる時聲はりあげてかなしさを歌ふ癖ありき
それも止みつる

わが住むは寺の裏部屋庭もせに白菊さけり見に
來よ女

ほこり湧く落日の街をひた走る電車のすみのひ
とりの少女

われうまれて初めてけふぞ冬を知る落葉のここ
ろなつかしきかな

いかにせむ胸に落葉の落ちそめてあるがごとき
をおもひ消しえず

いと靜かにものをぞおもふ山白き十二月こそゆ
かしかりけれ

窓あくればおもはぬそらにしらじらと富士見ゆ
る家に女すまひき

別るとて停車場あゆむうつむきのひとの片手に
ヴィオロンの見ゆ

うきことの限りも知らずふりつもるこのわかき
日をいざや歌はむ

枯れしのち最もあはれ深かるは何花ならむなつかしきかな

あさましき歌のみおほくなりにけりものの終りのさびしきなかに

一月より二月にかけ安房の渚に在りき、歌六十九首のうち。

おもひ屈し古ぼろ船に魚買の群とまじりて房州へ行く

海に來ぬ思ひあぐみてよるべなき身はいづくにも捨てどころなく

われひとり多く語りてかへり來ぬ月照る松のなかの家より

ともすれば咯くに馴れぬる血なればとこともなげにも言ひたまふかな

われよりもいささか高きわか松の木かげに立ちて君をおもへり

日は日なりわがさびしさはわがのなり白晝なぎさの砂山に立つ

ここよりは海も見えざる砂山のかげの日向にものをこそおもへ

火の山にのぼるけむりにむかひゐてけふもさびしきひねもすなりき　（大島見ゆ）

あはれこころ荒みぬればか眼も見えず海を見れども日を仰げども

やまひには酒こそ一の毒といふその酒ばかり戀しきは無し

あさましく酒をたふべて荒濱に泣き狂へども笑ふ人もなし

愚かなり阿呆鳥の啼くよりもわがかなしみをひとに語るは

わがこころ濁りて重きゆふぐれは軒のそとにも行くを好まず

けふ見ればひとがするゆゑわれもせしをかしくもなき戀なりしかな

耳もなく目なく口なく手足無きあやしきものとなりはてにけり

いつ知らず生れし風の月の夜の明けがたちかく吹くあはれなり

物かげに息をひそめて大風の海に落ちゆく太陽を見る

蜑が家に旅寢をすれば荒海の落日にむかひ風呂桶を据ゆ

青海の鳥の啼くよりいや清くいやかなしきはいづれなるらむ

好かざりし梅の白きをすきそめぬわが二十五歳の春のさびしさ

おほろおほろ海の風げる日海こえてかなしきそらに白富士の見ゆ

海のあなたおほろに富士のかすむ日は胸のいたみのつねに增しにき

安房の國朝のなぎさのさざなみの音のかなしさや遠き富士見ゆ

おほろ夜や水田のなかの一すぢの道をざわめき我等は海へ

おほろ夜のこれは夢かも渚にはちひさき音の斷えずまろべる

おほろ夜の多人數なりしそがなかのつかね髪なりしひとを忘れず

このままに無口者となりはてむ云ふべきことは
みな腹立たし

心いよよ獨りをおもふ身にしみていよいよひと
のなさけしげきまま

ニコライの大鈞鐘の鳴りいでて夕さりくればつ
ねにたづねき

歸らずばかへらぬままに行かしめよ旅に死ねよ
とやりぬこころを

思ひうみ斷えみ斷えずみわがいのち夜半にぞ風
の流るるを聽く

安房の國海のなぎさの松かげに病みたまふぞと
けふもおもひぬ

海に沿ふ松の木の間の一すぢのみちを獨りしけ
ふも歩むか

君が住む海のほとりの松原の松にもたれて歌う
たはまし

憫れまれあはれむといふあさましき戀の終りに
近づきしかな

かなしきはつゆ掩ふなくみづからをうちさらし
つつなほ戀ひわたる

はや夙くもこころ覺めるし女かとおもひ及ぶ日
死もなぐさまず

女なればあはれなればと甲斐もなくくやしくも
げに許し來つるかな

憫れぞとおもひいたれば何はおき先づたへがた
く戀しきものを

なにか泣くみづからもわれを欺きし戀ならぬか
は淸く別れよ

林なる鳥と鳥とのわかれよりいやはかなくも無
事なりしかな

別るとて冷えまさりゆく女にはわが泣くつらの
いかにうつれる

かへりみてしのぶよすがにだもならぬ斯る別れ
をいつか思ひし

別れといふそれよりもいや耐へがたしすさみし
我をいかに救はむ

戀ひに戀ひうつつなかりしそのかみに寧ろわかれてあるべかりしを

いつまでを待ちなばありし日のごとく胸に泣き伏し詫ぶる子を見む

詫びて來よ詫びて來よとぞむなしくも待つくるしさに男死ぬべき

ふとしては何も思はずいとあさきかりそめごとに別れむとおもふ

斯くばかりくるしきものをなにゆゑに泣きて詫びしを許さざりけむ

おもひやるわが生のはてのいやはてのゆふべまでをか獨りなるらむ

やうやうにこころもしづみ別れての後のあはれを味はむとす

■

灯赤き酒のまどるもをはりけりさびしき床に寢にかへるべし

冷笑すいのち死ぬべくここちよく涙ながしてわれ冷笑す

死ぬばかりかなしき歌をうたはましよりどころ
なく身のなりてきぬ

わがめぐりいづれさびしくよるべなきわかきい
のちが數さまよへり

さびしきはさびしきかたへさまよへりこのあは
れさの耐へがたきかな

花つみに行くがごとくにいでゆきてやがて涙に
ぬれてかへり來ぬ

櫛とればこころいささか晴るるとてさびしや人
のけふも髪をゆふ

おぼろなる春の月の夜落葉のかげのごとくもわ
れのあゆめり

まどかけをひきて寢ぬれば春の夜の月はかなし
く窓にさまよふ

首たかくあげては春のそらあふぎかなしげに啼
く一羽の鵝鳥

海の邊に行きて立てどもなぐさまず死をおもへ
どもなほなぐさまず

根の知れぬかなしさありてなつかしくこころを
ひくに死にもかねたる

ふたたびはかへり來ることあらざらむさなりい
かでかまたかへり來む

ほのかなるさびしさありて身をめぐるかなしみ
のはてにいまか來にけむ

見るかぎり友の顔みな死にはてしさびしきなか
に獨りものをおもふ

疲れはて窗をひらけばおぼろ夜の嵐のなかにな
く蛙あり

しめやかに嵐みだるるはつ夏の夜半のあはれを
寢ざめながむる

玻璃戸漏り暮春(ぼしゅん)の月の黄に匂ふ室(へや)に疲れてかへ
り來しかな

ガラス戸にゆく春の風をききながら獨り床敷き
ともしびを消す

四月すゑ風みだれ吹くこよひなりみだれてひと
のこひしき夜なり

また見じと思ひさだめつさりげなく靜かにひと
を見て別れ來ぬ

めぐりあひやがてただちに別れけり雨ふる四月
すゑの九日(ここのか)

あをあをと若葉萠えいづる森なかに一もと松の
花咲きにけり

窓ちかき水田のなかの榛の木の日にけに青み嵐
するなり

大木の青葉のなかに小鳥啼く細かに晝の日をみ
だしつつ

思ひいでてなみだはじめて頬をつたふ極り知ら
ぬわかれなりしかな

音もなく人等死にゆく音もなく大あめつちに夏
は來にけり

きはみなき生命のなかのしばらくのこのさびし
さを感謝しまつる

ひややかにつひに眞白き夏花のわれ等がなかに
あり終りけり

■

あなさびし白晝を酒に醉ひ痴れて皐月大野の麥
畑をゆく

畑なかにふと見いでつる痩馬の草食みゐたり水
無月眞晝

遠くゆきまたかへりきて初夏の樹にきこゆなり
眞晝日の風

松咲きぬ楓もさきぬはつ夏のさびしきはなの咲
きそめにけり

夏白晝うすくれなゐの薔薇(さうび)よりかすかに蜂の羽
音きこゆる

黄なる麥一穂ぬきとり手にもちて雲なきもとの
高原(たかはら)をゆく

高原や青の一樹とはてしなき眞白き道とわがま
へに見ゆ

麥畑のなかにうごける農人(のうにん)を見るつつなみだし
づかにくだる

わが顔もあかがねいろに色づきつ高原の麥は垂
穂しにけり

■

ひややかに涙はひとりながれたりこころうれし
く死なむとおもふに

影のごとくこよひも家を出でにけり戸山が原の
夕雲を見に

ひとつひとつ足の歩みの重き日の皐月の原に頬(ほほ)
白鳥(じろ)の啼く

わがいのち空に滿ちゆき傾きぬあなはるかなり
ほととぎす啼く

あめつちに獨り生きたりあめつちに斷えみたえ
ずみひとり歌へり

六七月の頃を武藏野の奥なる山上に送り
ぬ、歌四十六首のうち。

涙ぐみみやこはづれの停車場の汽車の一室(ひとま)にわ
れ入りにけり

水無月の山越え來ればをちこちの木の間に白く
栗の咲く見ゆ

啼きそめしひとつにつれてをちこちの山の月夜
に梟の啼く

たそがれのわが眼のまへになつかしく木の葉そ
よげり梟の啼く

日を浴びて野ずゑにとほく低く見ゆ涙をさそふ
水無月の山

松林山をうづめて靜まりぬとほくも風の消えゆ
けるとき

眞晝野や風のなかなるほのかなる遠き杜鵑の聲
きこえ來る

梅雨晴の午後のくもりの天地のつかれしなかに
ほととぎす啼く

わが行けば木木の動くがごとく見ゆしづかなる
日の青き林よ

ゆめみしはいづれも知らぬ人なりき寢ざめさび
しく君に涙す

きはみなき旅の途なるひとりぞとふとなつかし
く思ひいたりぬ

ゆふぐれの風ながれたる木の間ゆきさやかにひ
とを思ひいでしかな

放たれし悲哀のごとく野に走り林にはしる七月
のかぜ

松林風の斷ゆればわがこころふるへておもふ黑
髪の香を

かなしきは夜のころもに更ふる時おもひいづる
がつねとなりぬる

鋭くもわかき女を責めたりきかなしかりにしわ
がいのちかな

午後晴れぬ煙草のあまさしとしとに胸に浸む日
ほととぎす啼く

暈帶びて日は空にあり山山に風青暗しほととぎ
す啼く

わがこころ靜かなる時つねに見ゆる死といふも
ののなつかしきかな

秋風吹くつかれて獨りたそがれの露臺にのぼり
空見てあれば　（某新聞社欄上）

いつ知らず重ねて胸に置きたりし双のわが手を
見れば涙落つ

しづやかに大天地に傾きて命かなしき秋は來に
けり

栗の樹のこずゑに栗のなるごとき寂しき戀を我
等遂げぬる

こころ斯く荒みはてぬるわが顏のその唇をおも
ふに耐へず

破れたるたたみのうへに一脚の寢椅子を置きつ
秋の夜を寢る

手をとりて心いささかしづまりぬもの言へば彌寂しさの増す

或時はなみだぐみつつありし日の寂しき戀にかへらむとする

涙落つまぬかれがたき運命のもとにしづかに眼を瞑ぢむとし

かへり來よ櫻紅葉の散るころぞわがたましひよ夙く歸り來よ

ことごとく落葉しはてし大木にこよひ初めて風のきこゆる

晴れわたる空より樹より散りきたるああ落葉のさまのたのしさ

■

名も知らぬ河のほとりにめぐり來ぬけむり流る秋の夕に

身を起しまた忍びかに歩みいでぬ落葉ばやしの奥の木の間を

手ふるればはらはらと落葉す林のおくの一もと稚木

ながながと地上に身をば横へぬ夕陽の前の落葉
林に

ひややかに落葉林をつらぬきて鐵路走れり限り
を知らず

■

夕暮のそよ風のなかにいたみ出づ倦みし額に浮
ける蒼さは

ゆふぐれは蒼みて來りまた去りぬ窓邊の椅子に
われの埋るる

ゆふ日さし窓のガラスは赤赤と風に鳴るなり長
椅子に寢る

悲しげに赤き火を見せゆふ闇の椅子に人あり煙
草は匂ふ

■

容れがたし一度ぴわれを離れたる汝がこころは
また容れがたし

離れたる愛のかへるを待つごときこの寂しさの
呪ふべきかな

命なりそのくちびるを愛せよと消息に書き涙落しぬ

衰へしひとの額をかきいだき接吻せむとすればあはれ眼を瞑づ

かき抱けば胸に沈みてよよと泣くそのかみの日の少女のごとく

■

半島の國の端なる山かげのちさき港に帆を下しけり（三浦半島）

枝垂れ咲けり暗緑色の浪まろぶ海の岸なる老樹の椿

海岸のちひさき町の生活の旅人の眼にうつるかなしさ

風凪ぎぬ夕陽赤き灣内の片すみにゐて帆をおろす船

春白晝ここの港に寄りもせず岬を過ぎて行く船のあり

上路

上卷

海底に眼のなき魚の棲むといふ眼の無き魚の戀
しかりけり

わが足の著きたる地もうらさびし彼の蒼空の日
もうらさびし

靜やかにさびしきわれの天地に見えきたるとき
涙さしぐむ

死にがたしわれみづからのこの生命食み残し居
りまだ死に難し

光無きいのちの在りてあめつちに生くとふこと
のいかに寂しき

手を觸れむことも恐しわがいのち光うしなひ生
を貪る

おとろへしわが神經にうちひびきゆふべしらじ
ら雪ふりいでぬ

ゆふぐれの雪降るまへのあたたかさ街のはづれ
の群集の往來

ひとしきりあはく雪ふり月照りぬ水のほとりの
落葉の木立

白粉のこぼれむとする横顔に血の潮しきたりた
そがれにけり

窓かけのすこしあきたるすきまより夜の雪見ゆ
ねむげなる女

酔ひはてて小鳥のごとく少女等はかろく林檎を
投げかはすなり

一時の鐘とほくよりひびきいや深に三月風吹く
夜のなやむかな

枕より離れしときのしづかなる女のひとみわれ
に對へり

■

沈丁花青くかをれりすさみゆく若きいのちのか
なしき春に

われ歌をうたひくらして死にゆかむ死にゆかむ
とぞ涙を流す

なほ耐ふるわれの身體をつらにくみ骨もとけよ
と酒をむさぼる

酒すすればわが健かの身のおくにあはれいたま
しき寂しさの燃ゆ

あな寂し酒のしづくを火に落せこの薄暮の部屋
匂はせむ

酒のためわれ若うして死にもせば友よいかにか
あはれならまし

光線のごとく明るくこまやかにこころ衰へ人を
厭へり

おとろへの極みに來けむ眼に滿てるあらゆる人
の憎し醜し

蹌跟と街をあゆめば大ぞらの闇のそこひに春の
月出づ

深深と赤き灯よどむいろ街を醉うて走れば足音
がする

ひとつ飲めばはやくも紅く染まる頰の友もわが
眼にさびしかりけり

親も見じ姉もいとはしふるさとにただ檳榔樹を
見にかへりたや

衰へてひとの來るべき野にあらず少女等群れて
摘草をする　（四首戸山が原にて）

めづらかに野に出で來ればいちはやく日光に醉
ひつかれはてける

つみ草のそのうしろかげむらさきの匂へる衣の
かなしかりけり

梢あをむ木蔭にすわりつみ草のとほき少女を見
やるさびしさ

風光り櫻みだれて顏に散るこころ汗ばみ夏をお
もへる

いちはやく四月の街に青く匂ふ夏帽子をばうち
かつぎけり

かのをとめ顔の醜し多摩川にわか草つみに行か
むとさそふ

われ二十六歳歌をつくりて飯に代ふ世にもわび
しきなりはひをする

頰をすりて雌雄の啼くなりたそがれの花の散り
たる櫻にすずめ

月の夜半酔ひざめの身のとぼとぼとあゆめる街
の夏の木の影

貧しければ心も暗し蟲けらの在り甲斐もなき生
きやうをする

やうやくに待ちえしごとくわがこころあまえて
ありぬ病みそめし身に

命より摘みいだすべき一すぢのさびしさもなし
かなしさも無し

思ひいでて寢ぬ夜しもなきあはれさの二年を經
てなほつづくらむ

なほもかく飽くことしらずひとを思ふわれのこ
ころのあはれなるかな

ふらふらと野にまよひ來ればいつのまにさびしや麥のいろづきにけむ

はらみたる黑き小犬の媚びもつれ歩みもかねつ青き草原

いつ知らず摘みし蓬の青き香のゆびにのこれり停車場に入る

わがいのち盡きなばなむぢまた死なむわが歌よ汝(な)をあはれに思ふ

花見ればはなのかはゆし摘みてまし摘むともなにのなぐさめにせむ

六月中旬、甲州の山奥なる某溫泉に遊ぶ、歌二十首のうち。

雲まよふ山の麓のしづけさをしたひて旅に出でぬ水無月

たひらなる武藏の國のふちにある夏の山邊へ汽車の近づく

辻辻に山のせまりて甲斐のくに甲府の町は寂し夏の日

雲おもくかかれる山のふもと邊に水無月松の散り散りに立つ

山あひのちさき停車場ややしばし汽車のとまれ
は雲降りきたる

山山のせまりしあひに流れたる河といふものの
寂しくあるかな

わが對ふあを高山の峯越しにけふもゆたかに白
雲の湧く

おほどかに夕日にむかふ青山のたかき姿を見れ
ばたふとし

木の葉みな風にそよぎて裏がへるあを山に人の
行けるさびしさ

しらしらととほき麓をながれたる小川ながめて
夕山を越ゆ

わが小枝子思ひいづればふくみたる酒のにほひ
の寂しくあるかな

■

めづらかに明るき心さしきたりたまゆらにして
消えゆきしかな

枕敷きすひ終りたるひとすぢのけむりにこころ
なぐさめて寢む

あかつきの寢覺の床をひたしたるさびしさのそ
こに眼をひらくなり

なげやりのあまきつかれにうち浸り生きて甲斐
あるけふを讃へむ

衰ふる夏のあはれとなげやりのこころのすゑと
相對ふかな

涙ややにうかび出づればせきあげしかなしみは
早や消えて影なし

影さへもあるかなきかにうちひそみわがいのち
いま秋を迎ふる

君住まずなりしみやこの晩夏の市街の電車にけ
ふも我が乘る

蟬とりの兒等にをりをり行き逢ひぬ秋のはじめ
の風明き町

をみなへしをみなへし汝をうちみればさやかに
秋に身のひたるかな

またさらにこぞの秋まで知らざりしいのちの寂
に行きあへるかな

九月切めより十一月半ばまで信濃國に
遊べり、歌九十六首のうち。

名も知らぬ山のふもと邊過ぎむとし秋草のはな
を摘みめぐるかな

朴の木に秋の風吹く白樺に秋かぜぞふく山をあ
ゆめば

秋晴のふもとをしろき雲ゆけり風の淺間の寂し
くあるかな

酒飲めばこころ和(なご)みてなみだのみかなしく頬を
ながるるは何(な)ぞ

胡桃(くるみ)とりつかれて草に寢てあれば赤とんぼ等が
來てものをいふ

かたはらに秋ぐさの花かたるらくほろびしもの
はなつかしきかな

白玉(しらたま)の歯にしみとほる秋の夜の酒はしづかに飲
むべかりけれ

かなしみに驕りおごりてつかれ來ぬ秋草のなか
に身を投ぐるかな

小諸(こもろ)なる醫師(くすし)の家の二階より見たる淺間の姿(なり)の
さびしさ

秋風のそら晴れぬれば千曲川白き河原に出てあ
そぶかな

薄暗きこころ火に似て煽り立つ野山もうごき秋
かぜの吹く

顔ぢうを口となしつつ雙手して赤き林檎を嚙め
ば悲しも

秋くさの花のさびしくみだれたる微風のなかの
われの横顔

秋くさのはなよりもなほおとろへしわれのいの
ちのなつかしきかな

われになほこの美しき戀人のあるといふことが
かなしかりけり

松山の秋の峽間に降り來れば水の音ほそしせき
れいの飛ぶ

うちしのび都を落つる若人に朝の市街は青かり
しかな

身もほそく銀座通りの木の蔭に人目さけつつ旅
をおもひき

かへり來て家の背戸口わが袖の落葉松の葉をは
らふゆふぐれ

せきあげてあからさまにも小石めく涙わりなき
小夜もこそあれ

衰ふる夏の日ざしにしたしみて晝も咲くとや野の月見草

長月のすゑともなればほろほろと落葉する木のなつかしきかな

沈みゆく暗きこころにさやるなく家をかこみてすさぶ秋風

こころややむかしの秋にかへれるか寢覺うれしき夜もまじりきぬ

黄なる山まれに聞ゆる落葉はかなしき酒の香に似たるかな

秋かぜの信濃に居りてあを海の鷗をおもふ寂しきかなや

投げやれ投げやれみな一切を投げ出せ旅人の身に前後あらすな

秋かぜの都の灯かげ落ちあひて酒や酌むらむかの挽歌等は（友を憶ふ）

こほろぎの入りつる穴にさしよせし野にまろび寢の顔のさびしさ

さらばいざさきへいそがむ旅人は裾野の秋の草枯れてきぬ

火の山のいただきちかき森林を過ぎらむとして
こころいためり

雲去れば雲のあとよりうすうすと煙たちのぼる
淺間わが越ゆ

火の山の老樹の樅のくろがねの幹をたたけば葉
の散り來る

風立てばさとくづれ落ち山を這ふ火山の煙いた
ましきかな

見よ旅人秋のすゑなる山山のいただき白く雪つ
もり來ぬ

眼をとめて暮れゆく山に對ふ時しみじみと身の
あはれなりけり

あの男死なばおもしろからむぞと旅なるわれを
友の待つらむ

惶しき旅人のこころ去りあえず秋の林に來て坐
れども

秋の森ふと出であひし溪間より見れば淺間に煙
斷えて居り

溪あひの路はかなしく白樺の白き木立にきはま
りにけり

忘却のかげかさびしきいちにんの人あり旅をながれ渡れる

蟲けらの這ふよりもなほさびしけれ旅は三月をこえなむとする

終りなき旅と告げなばわがむねのさびしさなにと泣き濡るるらむ

はつとしてわれに返れば滿目の冬草山をわが歩み居り

冬枯の黄なる草山ひとりゆくうしろ姿を見むひもなし

嶺の草わがよこたはるかたはらに秋の淡雪きえのこり居り

かかる時ふところ鏡戀しけれ葉の散る木の間わが顔を見む

蒼空ゆ降り來てやがて去り行きぬ山邊の雲もあはれなるかな

いただきの秋の深雪に足あとをつけつつ山を越ゆるさびしさ

冬草山鳥の立つにもあめつちのくづれしごときおどろきをする

ものおもひ斷ゆれば黄なる落葉の峽のおくより
水のきこゆる

秋の日の空をながるる火の山のけむりのすゑに
いのちかけけれ

なつかしやわがさびしさにさしそひて秋のあは
雪ふりそめにけり

あはれなる女ひとりがすむゆゑにこの東京のさ
びしきことかな　（以下歸京して）

人知れず旅よりかへりわが友のめうとの家にね
むる秋の夜

友が子のゆふべさびしき泣顔にならびてものを
おもふ家かな

友のごとく日ごと疲れてかへり來むわが家とい
ふが戀しくなりけり

終りたる旅を見かへるさびしさにさそはれてま
た旅をしぞおもふ

われを見にくらき都會のそこ此處に住み居る友
がみなつどひ來る

電燈のさびしきことよ旅路よりかへりて友が顔
を見る夜

下卷

わがままは狂へる馬のすがたしきつかれて今は
横はるかな

かいかがみ路ばたの石手に取れば涙はつひに頬
にまろびいづ

歸るといふ世にいとはしきことのあり夜更けて
けふもとぼとぼ歸る

歩きつつひとり言いふはしたなき癖さへいつか
身につきしかな

鏡よりしづめる瞳われを見る死に對ふごとなつ
かしきかな

雪ふれり暗きこころの片かはにほのあかりさし
ものうきゆふべ

『あれ見給へ落葉木立の日あたりにすまひよげな
る小さき貸家』

路ばたの枯葉ばやしの日あたりにくるわがへり
のいつ寢入りけむ

つらかりしもののおもひでなつかしくなりゆく
ころもうらさびしけれ

蝙蝠に似むとわらへばわが暗きかほの蝙蝠に見
ゆるゆふぐれ

ただひとり離れて島に居るごときこころ暫くう
ごかぬゆふべ

賣りすてし銀の時計をおもひ出づこがらし赤く
照りかへす部屋

ゆふまぐれ赤いんきもてわが歌をなほしてゐし
が酒の飲みたや

ほんのりと酒の飲みたくなるころのたそがれがたの身のあぢきなさ

ややすこし遲れて湯より出るひとを待つ身かなしき上草履かな

槇の葉のあをの葉ずゑにつもる雪きゆるゆきをば見てありしかな

白粉のあまきかをりも身にのらぬ湯あがりびとをなにとすべけむ

かの友もこの友もみな白玉のこころ濁らずさびしきわれかな

風のごとくあとさきもなき苦笑ひつらにうかびぬ獨り坐るに

ひとりひとり親しきひとと離れゆくこのはかなさの棄てがたきかな

松も見ゆしら梅も見ゆ或るころのさびしき安房をおもひ出づれば

梅やらむとわれをさがして來しひとと松のはやしに行きあひしかな

梅つぼむころともなればいづくよりこのかなしさは身にかへるらむ

いづくまでわれをあはれむはて知らぬ汝がここ
ろは海かさびしや

■

移り來て窗をひらけば三階のしたの古濠舟ゆき
かよふ（飯田河岸）

さびしさのとけてながれてさかづきの酒となる
ころふりいでし雪

ふる雪になんのかをりもなきものをこころなに
とてしかはさびしむ

はつとしてこころ變れば蒼暗くそこひも見えず
降るそらの雪

濠のはた獨りをとこがねる家ぞこころして漕げ
した通ふ舟

がらす戸に白くみだれてふれる雪よりそひて見
れば寂しきものか

■

わが袖にひとつふたつがきえのこる雪もさびし
や酒やにのぼる

身もおもく酒のかをりはあをあをと部屋に滿ち
たり醉はむぞ今夜

いざいざと友に杯すすめつつ泣かまほしかり醉
はむぞ今夜

たまたまにただひとりして郊外にわが出で來れ
ば日の曇りたる

多摩川のあさきながれに石なげてあそべば濡る
るわがたもとかな

瀬もあさく藍もうすらに多摩川のながれてあり
ぬ憂しや二月は

多摩川の砂にたんぽぽ咲くころはわれにもおも
ふ人のあれかし

曇日の川原の藪のしら砂にあしあとつけて啼く
千鳥かな

川千鳥啼く音つづけば川ごしの二月の山の眼に
痛み來る

山のかげ水見てあればさびしさがわれの身とな
りゆく水となり

行くなかれかの人情のかなしきになれがいのち
のなにと耐へむや

石拾ひわがさびしさのことごとく乘りうつれと
て空へ投げ上ぐ

■

枝葉のみ眞暗くおもく打ち茂り根は枯るる樹か
こころさびしき

夜の牛乳飲みつつおもひふらふらと淺間の烟に
走るさびしさ

いつとなくわれと身體をたのむこと薄らぎそめ
て在りぬ晝夜

わだつみの底の濁りか手をつかねものうき空の
もとに棲みたる

さびしさは蝶にかも似むこころにはつゆかかは
らず過ぐす朝夕

松おほき彼の鎌倉の古山に行かばや風のなかに
海見む

■

軒したは濁れる海邊手に持つは晝のくるわの淺
きさかづき

手をうちて踊れるわれのあはれさになほ手をう
ちてしきりに踊る

かたはらにならぶ銚子の三つふたつ早やうらさ
びしゐひそめしかな

かたはらの女去りたるこころよさなみだのごと
き朝の酒かな

ちひさなる舟にわが乘りふらふらと漕ぎいでて
ゆく春の濁り江

街暗くかすめる裏の濁り江にい群れて啼かぬ海
の白鳥

濁り江はかすみて空もかき垂れぬわが居る舟に
啼き寄る鷗

枯草にわが寢て居ればそばちかく過ぎる子供の
なつかしきかな

われとべは犬も走りぬ目のかぎり薄日流れてか
なしき野邊に

枯草にわが寢て居ればあそばむと來て顏のぞき
眼をのぞく犬

ゆふまぐれ遊びつかれてあゆみ寄る犬と瞳のひ
たと合ひたる

うす曇りなまあたたかき冬の日に犬とあそぶは
かなしきことぞ

ましぐらにわれを馳け拔き立ちどまり振返る犬
の眼を打擲(てうちやく)す

膝にゐて深き毛を垂れ樫の葉に夕日散るときわ
が小犬鳴く

■

若き日をささげ盡くして嘆きしはこのありなし
の戀なりしかな

はじめより苦しきことに盡きたりし戀もいつし
か終らむとする

おもかげの移るなかれとひとのうへにいのりし
ことはまたくあれども

五年(いつとせ)にあまるわれらがかたらひのなかの幾日を
よろこびとせむ

一日だにひとつ家にはえも住まずえ忘れもせず
心くさりぬ

わがために光ほろびしあはれなるいのちをおも
ふ日の來ずもがな

ありなしの貧しき戀にいかなればわが泣くこと
の斯くも繁なる

■

わびしさやふとわが立てる足もとの二月の地を
見て歩み出づ

誰にもあれ人見まほしきこころならむけふもふ
らふら街出で歩く

三階の玻璃窓つつみ煤烟のにほへるなかにひと
り酒煮る

■

そこはかと深山の松葉ちることか寢ざめのここ
ろ寄るところなし

明けがたの床に寢ざめてわれと身の呼吸するこ
ともなにぞさびしき

先づ啼くは濁る濠邊の鶺鴒(いしたたき)ほの青き朝を寢ざめてあれば

かなしくもいのちの暗さきはまらばみづから死なむ砒素をわが持つ

遠海のひびくに似たるなつかしさわが眼のまへの砒素に集る

なとがめそ腐るいのちを恐ろしみなつかしくこそ砒素をわが持て

まなこ閉ぢ口をつぐめるさびしさに得耐へずついと立てど甲斐なし

ふるさとの美美津の川のみなかみにひとりし母の病みたまふとぞ

さくら早や背戸の山邊に散りゆきしかの納戸(なんど)に や臥したまふらむ

病む母よかはりはてたる汝(なれ)が兒を枕にちかく見むと思ふな

病む母を眼とぢおもへばかたはらのゆふべの膳に酒の匂へる

む母をなぐさめかねつあけくれの庭や掃くら
むふるさとの父

■

終に身を酒にそこなひふるさとへ歸るか春のさ
びしかるらむ　（友　こ）

眼も鈍くこころくもればおのづから眉さへ重し
春の街見ゆ

靜かなりし日にかへらむとこころより思へるご
としわれのよこ顔

誰ぞひとりほほゑめばみないちように酒をしぞ
思ふ部屋のゆふぐれ

まさむねの一合瓶のかはゆさは珠にかも似む飲
まで居るべし

■

河を見にひとり來て立つ木（こ）のかげにほのかに晝
を啼く蛙あり　（以下下總の海岸にて）

眼とづるはさびしきくせぞおほぞらに雲雀啼く
日を草につくばひ

根のかたにちさく坐れば老松の幹よりおもく風
降り來る

耐へがたくまなこ閉づればわが暗きこころ梢に
松風となる

波もなき海邊の砂にわが居れば空の黄ばみて春
の月出づ

なぎさ邊の藻草昆布のむらがりのなつかしいか
な春の月出づ

しら砂にかほをうづめてわれ禱るかなしさに身
をやぶるまじいぞ

このこころ慰むべくばあめつちにまたなにもの
の代ふるあらむや

■

衣ぬげば五月の松のこずゑより日あをく流れ肌
に匂へる

かたはらの地を見詰めて松の根にわれの五月を
さびしがるかな

松の葉のしげみにあかく入日さし松かさに似て
啼ける山雀

こまやかに松の落葉の散りばへるつちより蟬の子の這ひ出づる

ゆく春のゆふ日にうかみあかあかとさびしく松の幹ならぶかな

わが肌の匂ふも肌のうへを這ふ蟻のあゆみもさびしき五月

松ばやしわが寢て居ればひらひらと啼いて燕がまひ過ぎしかな

あなあはれいつかとなりの楢の葉に這ひもうつれる簑蟲の子よ

下總の國に入日し榛はらのなかの古橋わが渡るかな　（以下下總新利根河畔にて）

ただひとり杉菜のふしをつぐことのあそびをぞする河のほとりに

藪すずめ群るる田なかの停車場にけふも出で來て汽車を見送る

しろき花散りつくしたる下總の梨の名所のあさき夏かな

あめつちの青くけぶれる河の邊の葭原に巣をまもる葭切鳥

榛はらのあをくけぶれる下總に水田うつ身はさびしからまし

死か藝術か

手術刀

蒼ざめし額(ひたひ)つめたく濡れわたり月夜の夏の街を
我が行く

わが家に三いろふたいろ咲きたりし夏くさの花
も散り終りけり

かなしくも痛みそめたるものおもひ守りて一日(ひぢひ)
もの喰(た)べず居り

野にひとり我が居るゆゑかこのゆふべ木木のさびしく見えわたるかな

粟刈れるとほき姿のさびしきにむかひて岡にあを草を籍く

おほいなる青の朴の葉ひと葉持ち林出づればわが身さびしも

いかに悲しく秋の木の葉の散ることぞ髪さへ痛めいのち守らむ

わが痛めるいのちの端に觸れ觸れて秋の木の葉の散りそめにけり

なにに然かおびゆるものぞ我がいのち身をかためたるすがた寂しも

わが手より松の小枝にとびうつる猫のすがたのさびしきたそがれ

ただひとつ風にうかびてわが庭に秋の蜻蛉のながれ來にけり

しのびかに遊女が飼へるすず蟲を殺してひとりかへる朝明け

なにやらむ思ひあがりて眼も見えず秋の入日の街をいそぎぬ

酒無しにけふは暮るるか二階よりあふげば空を
行く鳥あり

我がうしろ影ひくごとし街を過ぎひとり入りゆ
く秋植物園

うなだれて歩むまじいぞ櫻落葉うす日にひかり
はらはらと散る

其處に在り彼處にみえしわがすがたさびしや夜
の街に霧降る

秋かぜや日本(やまと)の國の稻の穗の酒のあぢはひ日に
まさり來れ

動物園のけものの匂ひするなかを歩むわが背の
秋の日かげよ

身も世もなく兒をかはゆがる親猿の眞赤きつら
に石投げつけむ

秋の入日猿がわらへばわれ笑ふとなりの知らぬ
人もわらへる

秋の日の動物園を去らむとしかろき眩暈(めまひ)をおぼ
えぬるかな

はつとして歩みをとどめなにやらむ拂ふがごと
く癖ぞ袖振る

停車場に入りゆくときの靜かなるこころよ眼に
うつる人のなつかし

わびしやなまたも夜つゆの軒したにかへりて雨
戸たたかねばならず

眼の見えぬ夜の蠅ひとつわがそばにつきゐて離
れず恐しくなりぬ

眼馴れたるこの樹四時に落葉せず黑き實ぞなる
秋風立てば

かなしくも我を忘れてよろこぶや見よ野分こそ
樹に流れたれ

いつとなく秋のすがたにうつりゆく野の樹樹を
見よ靜かなれこころ

秋となり萩はな咲けばおどろきてさしぐむここ
ろ見るにしのびず

落葉と自殺

手探れど手には取られず眼開けば消えて影無し
さびしあな寂し

自殺といふを夢みてありきかなしくも浮草のごとく生きたりしかな

窗ひらけばぱつと片頬に日があたるなつかしいかな秋もなかばなり

枯草のわが身にあはれ血のごとく夜深き市街雨落ちきたる

雨雨雨まこと思ひに勞れるきよくぞ降り來しあはれ闇を打つ

窗ひとつ北にひらきてうす暗きこの部屋の好さよ友が椅子に倚る

法隆寺のまへの梨畑梨の實をぬすみしわかき旅人なりき　（旅を懷ふ二首）

大和の國耳なし山の片かげの彼の寺の扉をたたかばや此の手

茶の花を摘めばちひさき黒蟻の蕋にひそめりし
みじみ見て棄つ

わが身は地畑のくろつち冬の日の茶の花のなど
したしいかなや

相模の秋おち葉する日の友が妻わすられぬ子に
似てうつくしき

縁がわの君が眞紅のすりつぱをふところにして
去なむとぞおもふ

ほどもなく動きいだせる夜の汽車の片すみにわ
れ靜かに眼をもづ

あをあをと海のかたへにうねる浪岬の森をわが
獨り過ぐ

浪浪浪沖に居る浪岸の浪やよ待てわれも山降り
て行かむ

地よりいま生れしに似るあを海にむかひて語る
ふたつ三つの言葉

またもわれ旅人となりけふ此處のみさきをぞ過
ぐ可愛しきは浪

海は死せでありけり青き浪ぞ立ついたましいか
な砂にわが居る

ただひとり知らぬ市街に降り立ちぬ停車場前に
海あり浪寄る

海にひとつ帆を上げしあり浪より低し悲しや夕
陽血に似て滴る

港には浪こそうねれ夕陽は浪より椅子のわが顔
に映ゆ

たまたまに朝早く起き湯など浴び獨り坐りてむ
く林檎かな

庭の冬樹のはだえにあたる薄日のいろ、朝林檎を
もとむるこころ

おとろへし生命の酸味のひややかに澄む朝なり
手にとる林檎

なにやらむさびしき笑ひ浮きいづる片頬にあて
ぬつめたき木の實

うるはしき冬にしあるかな獨りさびしくこもれ
る部屋にけふも夕陽す

はらはらと降り來てやみぬ薄暗き窓邊の樫の葉
に殘る雪

眼のまへに散りし木の葉に惶しくもの言はむと
し涙こぼれぬ

森のなかにちさき畑あり夕日さす麥の青き芽い
たましきかな

地よ感謝す汝とし居れば我がこころしづかに燃
えて指も觸れ難し

わが手足われの生命のそのままに今日こそ動け
死なむとぞ思ふ

木の根に落葉かき籍き手をあつる我が廣き額の
なつかしきかな

その枝折りこの枝を折り一葉無き冬がれの森に
獨りあそべり

信濃より甲斐へ旅せし前後の歌十六首
のうち。

おなじくば行くべきかたもさはならむなにとて
山へ急ぐこころぞ

問ふなかれいまはみづからえもわかずひとすぢ
にただ山の戀しき

さびしさを戀ふるこころに埋(うづ)れて身にこともな
し山へ急がむ

山戀ふるさびしきこころなにものにめぐりあひ
けむ涙ながるる

山に入り雪のなかなる朴の樹に落葉(ら)松(まつ)になにと
ものを言ふべき

ただひともと伐り残されし種子(たね)松(まつ)の喬(たか)くしげれ
り春となる山

ただ一羽山に烏の啼くことも幹にわが影のうつ
るもさびしや

枝もたわわにつもりて春の雪晴れぬ一夜やどり
し宿の裏の松に

雪のこる諏訪山越えて甲斐の國のさびしき旅に
見し櫻かな

をちこちに山櫻咲けりわが旅の終らむとする甲
斐の山邊に

見わたせば四方の山邊の雲深み甲斐は曇れり山
ざくら咲く

足袋ぬぎてわか草ふめばあぢきなやなにに媚び
むとするこころぞも　（植物園十首）

木木はみなそびえて空に芽をぞ吹くかなしみて
居れば踏む草もなし

折しもあれ春のゆふ日の沈むとき樅の木立のな
かに居りにき

さびしといふ我等がこころむきむきに燃えわた
りつつ夏となりにけり

はつ夏のときは樹の蔭の地にまろび帽ぬげばい
や戀しさの燃ゆ

植物園の松の花さへ咲くものを離れてひとり棲
むよみやこに

葉を茂みしだれて地に影の濃きこの樫の樹に夏
は來にけり

身にちかき木の根木の根をながめやりつめたき
春の地にまろび居り

立ち出でつとほく離れて見るときのかの樫の樹
の春はさびしき

四月十三日午前九時、石川啄木君死す

初夏の曇りの底に櫻咲き居りおとろへはてて君
死ににけり

君が娘は庭のかたへの八重櫻散りしを拾ひうつ
つとも無し

病みそめて今年もあはれさくら咲きながめつつ
君の死にゆきにけり

酢のごとき入日に浮む麥の穂の穂さきかなしや
摘まむと思ふ

わが蒼き片頰にあたる血のごときいろの入日を
貪り吸ふも

野は入日いばらのかげにありやなし水もながれ
て我が歸るなり

入日あかき野なかの村にひと群れて家つくり居
り唄の聲悲し

眼のまへを巨いなる浪あををとうねりてゆき
ぬ春のゆふぐれ　（鎌倉三首）

わだつみの浪の一ひら掌にもちて死なむとぞ思
ふ夕陽のまへに

並み立てる岬のあひにゆらゆらと海のゆれ居て
ゆふぐれとなる

■

いたづらに窓に青樹の葉のみ搖れわれらが逢ふ
日さびしくもあるかな

かなしき岬

うら若き越後生れのおいらんの冷たき肌を愛づ
る朝かな

笑みながらじつと見つむるまなざしに青みて夏
の朝は來にけり

なにやらむ妹女郎をたしなむる姉の女郎に朝は
さびしき

お女郎屋の物干臺にただひとり夏の朝を見にのぼるかな

初夏の朝の廊下のつめたきにまろびて起きぬ若きおいらん

桐の花うすく汗ばみ日ものぼりわがきぬぎぬのときとなりゆく

■

はつ夏の街の隅なる停車場のほの冷さを慕ひ入るかな

われ人もおなじ心のさびしさか朝青みゆく夏の停車場

しみじみと遠き邊土のたび人のさびしき眼して停車場に入る

朝な朝な停車場に來て新聞紙買ふ男居りて夏となる街

水無月の青く明けゆく停車場に少女にも似て動く機關車

午前九時起きも出づればこの市街はやも五月の雲にくもれる

五月末、相模國三浦半島の三崎に遊べり、
歌百十一首のうち。

あさ、なあさな午前は曇るならひとて今日も悲しく海をおもへり

戀ひこがれし海にゆくとて買ふシャボンわが蒼き、掌に匂ふ朝の街

あらさびしやわが背のかたに少女居りほほ笑める如し海へのがれむ

明日ゆかむ海思ひをればゆきずりの街の少女もかなしみとなる

わが渡る五月の海に魚海月さびしく群れてさざ波もなし

海縁の五月の雲もわが汽船の濡れしへさきもうらがなしけれ

曇り日の汽船の機關に石炭をつぐ萠黄服海はわびしき

古汽船のあぶらの匂ひなつかしく身に浸み來て午後の海渡る

わが古汽船雲のかげりの浪をわけさびしき海をさすよ岬へ

雲深き岬へわたる古汽船のあとより起る夏の青浪

夏あさき岬のはなに立つ浪のなつかしいかなわが汽船を揺る

雲晴るれば海はにはかに紺碧の浪立ちわたり揺るるわがふね

青葉の岬ながきなぎさを打ちぬらし雨の走れば
ゆるるわが汽船

浪の穂にかすかにやどる赤きいろ夏の夕日のなやましきかな

皐月の雲のかげりにうすき藍ひきうすき藍ひき
伊豆が崎見ゆ

あかあかと西日にうかび安房が崎相模の海に近く寄るなり

少女子の青パラソルよりなほひろき麥藁帽を著て海に入る

太陽の正面の岬きずつきて血のたる指し貝ひろふかな

ゆふ浪や五月の海の道化者やどかりの子がせつせとはたらく

岬より入日にむかひうすうすと青色の灯をあぐ
る燈臺

あをやかに雙眼鏡にうつり出で五月の沖に魚釣
る兒等よ

なつかしく午後二時ぞうつ、風呂やわかむ、この窓
掛にゆるる海の日

月の出の巖の暗きに時をおき浪白く立ち千鳥啼
くなり

わが眠る崎の港をうす青き油繪具に染めて雨ふ
る

みな忘れよ崎のみなとのこのひと夜五月の雨が
ふりそよぐなり

旅人のからだもいつか海となり五月の雨が降る
よ港に

ほろびゆくこの初夏のあはれさのしばしはとま
れ崎の港に

ゆく春の海にな浮きそ浪ぞ立つかなしき島よと
く流れ去れ

あを海の岬のはなに立つ浪の消しがたくして夏
となりにけり

雲一片二ひら三ひら浮かずもあれ岬に立ちてわ
がなげく日に

海よ揺れよわれのいのちは汝よりつねに鮮かに
悲しみて居り

あをあをと雲にかげれる彼の岬このみさきいざ
とびて渡らむ

聲高く歌ひ終れば眼のまへの世界は蒼し死ぬに
かあらむ

海よ悲しあをき木の實を裂くごとく悔はわが身
につねに新らし

ゆらゆらと地震のわたれば身をくづし戸外の山
を見やるおいらん

耳すませばまことと梟にありにけりさびしき鳥を
きけるものかな

この遊女かならず夭く死ぬべけむそち向きのか
ほの夏の朝かげ

あたらしきうすむらさきのこの紙幣夏のみなと
の朝の遊女屋

わが二十八歳のさびしき五月終るころよべもこ
よひも畸は地震する

鰹賣ると月夜の海の魚のごと人こそさわげ崎の
月夜に

さらさらと蒼き月夜の浪ぞ寄る浪うちぎわに積
まれし死魚に

月の夜の灣(わん)のすみの砂原に聲のみの人の群れて
死魚賣る

あんまりに死魚賣る聲のかしましきに月夜のみ
なとわれも寢られず

夜をこめて崎の港に入り來る船は死魚積む船な
らぬなし

みどり兒の死にゆく如く月あをき崎の港を出で
てゆく船

ただひとり貝拾ひをれば午後の雲うすうす岬過
ぎてゆくなり

洞の暗きに貝とりつかれ見かへれば空にさびし
くあがる青浪

崎に立ち海のかなしきふくらみに岩を碎きて投
げつくるかな

誰となきうらめしき肌刺すごとくうす青き蟹を
追ひめぐるかな

夏となり何一つせぬあけくれのわれに規則のごとく齒の痛む

黑いろの蟲のやうなる商人がわが部屋に來てさいそくをする

うす青き夏の木の果を嚙むごとくとしの三十路に入るがうれしき

まづしくて蚊帳なき家にみつふたつ蚊のなき出でぬ、添ひ臥をする

かんがへて飲みはじめたる一合の二合の酒の夏のゆふぐれ

この熱い朝湯よ汗は出てしまへ青の木の葉の如くなりてむ

わがくせのながいかはやも何とやらたのしみとなり爲す事もなし

朝の飯すごすまじいぞこの心しんみりとゐて筆とりてまし

わが好きの眼とづるに似し心地今日もふらふら芝居見にゆく

指先に拭けばなみだにほんのりと汗もまじりて
夏はわびしき

夏の日の芝居の笛のかなしさよはやく夜となれ
曇り日となれ

友はみな兄の如くも思はれて甘えまほしき六月
となる

水無月や木木のみづ葉もくもり日もあをやかに
して友の戀しき

六月末、多摩川の上流なる御嶽山に登り
ぬ、歌七首

鐵道の終點驛の溪あひの杉のしげみにたてる旅籠屋

あをやかに山をうづむる若杉のふもとにほそき
水無月の川

多摩川のながれのかみにそへる路麥藁帽のおも
き曇り日

頰につたふ涙ぬぐはぬくせなりし古戀人をおも
ふ水上

搖るるとなく青の葉ずゑのゆれて居る溪の杉の
樹見つつ山越ゆ

ふるへ居る眞青の木の葉つみとりて瞼にあつる
山はさびしも

おく山の木かげの巖にかかりたるちひさき瀧を
見つつ悲しき

夏の部屋うつとりと繪本かさねたる膝のほとり
の朝のなやみよ

なかなかに繪を見ることもこの朝のおちるぬむ
ねにかなしかりけり

けふも晴るるか暗きを慕ふわがこころけふも燃
ゆるか葉月の朝空

夏はいまさかりなるべし、とある日の明けゆくそ
らのなつかしきかな

やはらかき白の毛布に寢にもゆく晝のなやみか
佛蘭西へ行く　（山本君を送る）

わが薄き呼吸も負債におもはれて朝は悲しやダ
ーリアの花

うつとりとダリアの花の咲きて居り、ひとのなや
みを知るや知らずや

肺もいまあはき勞れに蒼むめりダリアの園の夏
の朝の日

とほり雨朝のダリアの園に降り青蛙などなきい
でにけり

とほり雨過ぎてダリアの園に照る葉月の朝の日
のいろぞ憂き

夏の樹にひかりのごとく鳥ぞ啼く呼吸あるもの
は死ねよとぞ啼く

みなかみ

故郷

ふるさとの尾鈴の山のかなしさよ秋もかすみの
たなびきて居り

草山に膝をいだきつまんまろに眞赤き秋の夕日
をぞ見る

草山にねてあるほどにあかあかと去にがてにす
と夕日さすなり

阿蘇荒れの日にかもあらめうすうすとかすみの
ごとく秋の山曇る

母が飼ふ秋蠶の匂ひたちまよふ家の片すみに置
きぬ机を

ふた親もわが身もあはれあかあかと秋の夕日の
かげに立つごとし

いづくにか父の聲きこゆこの古き大きなる家の
秋のゆふべに

まんまるに袖ひきあはせ足ちぢめ日向にねむる、
父よ風邪ひかめ

父よなど坐るとすればうとうとと薄きねむりに
耽りたまふぞ

とりわけて夕日よくさす古家の西の窓邊は父の
よく居るところ

ほたほたとよろこぶ父のあから顔この世ならぬ
尊さに涙おちぬれ

わがそばにこころぬけたるすがたしてとすれば
父の來て居ること多し

二階の時計したの時計がたがへゆく針の歩みを
合はせむと父

老いふけし父の友どちうちつどひ酒酌む冬の窓の夕陽

蜜蜂も赤く染まりて夕日さすかなしき軒をめぐるなりけり

煙草の灰がぽつたりと膝におちしときなつかしき瀬の音聞えくるかな

おお、夜の瀬の鳴ることよおもひでのはたととだえてさびしき耳に

すばかりちひさき絵にも似て見ゆれおもひつめたる秋の東京

罵すことみな悔とならざるなき我が日今朝も新しく輝きてあり

愛すべきは朝の光線なりまことに光線にむかへる我が疲れし瞳なり

健康の完かりせばこのさびしさ消えむかとおもふ、朝、冷えし鏡

あはれ悲し玉にくもりのなきごとく健かならむ健かならむ

われを恨み罵りしはてに嘸みたる母のくちもとにひとつの歯もなき

母が愛は刄のごときものなりきさなりいまだに
そのごとくあらむ

夕されば爐邊に家族つどひあふそのときをわれ
はもとも恐れき

わづかの酒に醉ひては母のつねに似ずくちかろ
く、夜のかなしかりけり

あはれ今夜のごとく家族のこころみな一いろに
あれ一いろにあれ

姉はみな母に似たりきわれひとり父に似たるも
なにかいたまし

あはれみのこころし湧けるときならむしみじみ
ものいふ母の悲しも

くづ折れてすがらむとすれど母のこころ悲哀に
澄みて寄るべくもなし

うちつけにものいふことをも恐れ居るその兒を
なほし憎みたまふや

家に出づる羽蟻の話も案のごとくこの不孝者の
うへに落ち終りけり

母、姉、われ、涙ぐみたる話のたえま魚屋入り來ぬ、魚
の匂へる

その障子もこの窓もみなしめきりて冬の夕陽に
親しみて居り

椅子ながら山山の間の落日を見居れば、二階、父の
入り來ぬ

葉よりさらにみどりに透けるちさき蟲薔薇の葉
に居りき、夕陽に透ける薔薇に

薔薇の葉を喰ふ蟲を見出しこの部屋のなにやら
明るくなりし思ひす

信ぜむとねがひ信じたりとおもひ思へどもここ
ろの何處にか細き風吹く

わが朝夕の生活をうすき板のごとく思ひて裏よ
り覗かむとする

起き出でて戸を繰れば瀨はひかり居り冬の朝日
のけぶれる峽に

靜かなれ冬の日、わきてけふ一日、朝よりこころ死
せるがごときに

机のうへの二りんの薔薇にも愛憎の湧く日なり、
眼昏し

青杉の大枝をさせば北窓の机小暗しわれの讀書
に

黒薔薇

納戸の隅に折から一挺の大鎌あり、汝が意志をまぐるなといふが如くに

新たにまた生るべし、われとわが身に斯く云ふとき、涙ながれき

靜かにいま薔薇の花びらに來て息へるうすきいのちに夜の光れり

こころづけば鏡に薔薇がうつりてあり、つとわが顔の動けるそばに

ふと觸るればしとどに搖れて陰影をつくるくれなゐの薔薇よ冬の夜の薔薇よ

ひらかむとする薔薇、散らむとする薔薇、冬の夜の枝のなやましさよ

悲しみとともに歩めかし薔薇、悲しみの靴の音をみだすなかれ薔薇

吸ふ呼吸の吐く呼吸のわれの靜けさに薔薇のくれなゐも病めるが如し

やうやくに馬の跫音のきこえきぬ悲しき夜も明
けむとすらし

机の前の夜の山よりまひて來し濃みどりの蛾の
とびてやすまず

灯を消すとてそと息を吹けば薔薇の散りぬかな
しき寢覺の漸く眠りを思ふときに

家のいづくにか時計ありて痛き時を打つ、陰影よ
り出でよ、出でよとて打つ

陽を浴びつつ夜を思ふはこころ痛し、新しき不可
思議に觸るるごとくに

脂肪にや額の皮膚のこはばれる或る冬の日の午
後、多き蜂

この山梔子の實に似ても靜かなれかし、何故にわ
れの斯くあはただしきや

高き窓より一すぢの薄明り、さすげなれども冷し
わが眼

窓より光線を見るも厭はし、わが眼松の皮となる
に似たれば

ラムプを手に狹き入口を開けば先づ薔薇の見え
ぬ、深き閣の部屋に

忘れものばかりしてゐるやうな、おちつきのない
男の机の鮮紅薔薇

晝は晝で、夜は一層薔薇が冷いやうだ何しろおち
つかぬ自分の心

薔薇が水を吸ひやめたやうだ、玻璃の瓶の冬のば
らが

朝など、何だか自分が薄い皮ででもあるやうに思
はるるときがある

冷い、冷いと心からふるへて爐のそばに寄つてゆ
く、朝のわが身をいとしいと思ふ

父の死後

あなかしこし靜けき御魂に觸るるごとく父よ御
墓にけふも詣で來ぬ

御墓ちかづく、墓場小暗き坂みちにこころは黑の
玉とかがやき

喪の家の爐邊、榾火のかげに赤き母が指姉がゆび
我が指のさびしさよ

いろいろに考ふれど心に染むことなし、來む明日
さへ、おもへば恐し

空にひくき冬の朝の太陽、底無しのさびしき夜よ
り出でて來しわれ

起きいづれば太陽はとく峰にあり、氷れる溪にの
ぞみたる家

思ひだしたやうに水仙が匂ふ、水仙が匂ふ、朝の讀
書の机に

何にもあれ貪ることに倦みて來ぬ、わびしや友情
にも

靜坐に耐へられなくなれば、ついと立つ、立つて歩
く、貧しい心そのもののやうに

人がみなものをいふうとましさよ、わがくちびる
のみにくさよ

わがたいくつの夜に蟇の啼くが聞ゆ、雨もまばら
にわが心にふりそそぐ

こころの闇に浸みる瀨の音、心のうつろに響く瀨
の音、瀨の音、瀨の音

溪の瀨のおとはいよいよ澄みゆき夜もふかめど
いづくぞやわがこころは